林芙美子「ボルネオダイヤ」論

——^{ファセット}多面体としてのボルネオ

Fitriana Puspita DEWI (フィトリアナ・プスピタ・デウィ: Ph.d Student.

Ritsumeikan University Graduate School of Letters)

✉ fitrianapd@gmail.com

(日本)立命館大学大学院文学研究科博士後期課程。日本近代文学。主著に「林芙美子「古い風新しい風」論—ボルネオの表象を巡って」(京都:『外地日本語文学研究』,『外地』日本語文学研究会, 2019)、「林芙美子のインドネシアの紀行文研究」(インドネシア:『近現代日本研究アンソロジー』2020)など。

A Study of Hayashi Fumiko “Borneo Daiya”

: The Multiple Faces of Borneo

This paper focuses on Hayashi Fumiko's short story “Borneo Daiya” which is written based on her experiences in Borneo in 1943. Through stories about Japanese people who were sent to Borneo during the wartime such as Ianfu (Comfort Women) and Civilian Army, Fumiko raises the reality of Japanese Colonialization in Borneo -as the land of Japanese occupation- and its reflection into Japan itself. By exploring the meaning of the diamonds mined in Borneo for each character, this study analyze how these diamonds represent the realities of Japanese Colonialism in Borneo and examine the author's motives in writing about this theme.

In the first section, this study considers the importance of geographical aspects of the novel. In the second section it examines the relationship between Hayashi Fumiko and Borneo. In the third section there is an analysis of the significance of the platonic love between Manabe and Tamae, which emerges in the shadow of the Japanese colonization of South Borneo. In the fourth section, this study illustrates the form of pseudo-patriotism that Manabe's wife displays in offering the diamond to the government. In the fifth section, this study investigates how Tamae's body is represented as being analagous to the diamonds themselves from a colonialist point of view. Lastly, this study discusses the author's closeness to Borneo and the island's significance for Hayashi Fumiko.

Keywords Borneo(ボルネオ), Japanese Comfort Women(日本女性慰安婦), Japanese Colonization(日本植民地), Pseudo-Patriotism(疑似愛国心), Wartime(戦時中)

1 はじめに 地域研究の重要性

南方についての林芙美子の著作は、おおむね三つのジャンルに区別できる。まず、戦中に発表したルポルタージュ・紀行文・詩など、また南方での取材を記録した手帳・日記など、そして戦後に発表した小説である。うち、戦中のものは時局の要請に応じて書かれており、その内容は必ずしも彼女の本心を反映しているとは言えない。

戦後、さまざまなしがらみから解放された林芙美子は、これまで書けずにいた南方での体験を小説の題材として投入するようになる。もちろん彼女の戦争協力を踏まえるならば、それをかつての抑圧に対する反発や、戦争の悲惨さの告発といったように単純化して語ることはできない。ともかく、戦後の〈南方もの〉の位相を明かにするためには、前述した三つのジャンルを横断的に用いる必要がある。

林芙美子の〈南方もの〉のなかで、もっともよく知られているのは『浮雲』である。すでに『浮雲』と南方についての論文も数多く発表されているが、じつのところ、彼女が『浮雲』の舞台であるベトナムに足を運んでいたことを裏付ける資料はみつかっていない。それどころか、手帳や日記をみる限り、彼女がベトナムに立ち寄った可能性はほとんどないと言える。すなわち『浮雲』は、実証的な意味では〈南方もの〉とは言い難いのである。

一方、林芙美子は南方での多くの時間をインドネシアで過ごしている。彼女は取材のためにスマトラ、ジャワ、バリ、ボルネオ島など、およそインドネシアの三分の二に及ぶ地域をめぐり歩いている。実際、『浮雲』以外の戦後の作品の多くは、これらを舞台としている。彼女の〈南方もの〉を研究するにあたり、ベトナムよりもインドネシアを重視せねばならないのは、以上のような理由からである。

ここで林芙美子のインドネシアでの旅程をふり返ってみたい。彼女は1942年12月9日、インドネシアの首都ジャカルタに降り立ち、約一週間に滞在した後、東ジャワ州のスラバヤ市へと向かっている¹。手帳によれば15日、さらにスラバヤから飛行機で南ボルネオ州のバンジャルマシン市へと向かっており、ここでは23日間もの時間を過ごしている²。すなわち彼女の南方での本格的滞在は、ボルネオからはじまると言ってよく、山下聖美³が指摘するように、ボルネオは彼女の文学的活動のスタート地点となっている⁴。

林芙美子はこのボルネオにまつわる、さまざまな作品をのこしている。滞在中には

¹ 「美しき緑の島—林芙美子さんのジャワ印象」(『ジャワ新聞』1942.12.10)。

² 南方従軍時のメモ類(1943)、このメモは東ジャワ州とボルネオの滞在の間に使ったメモだと推測される。内容はジャワの農業事情や人口、農村滞在中の活動、現地人との交流、南ボルネオ到着日などの記録である。

³ 山下聖美「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」(『日本大学芸術学部紀要』No.59, 2014.3)。

⁴ この林芙美子とボルネオとの関係については、望月雅彦が『林芙美子とボルネオ島—南方従軍と『浮雲』をめぐって』(ヤシの実ブックス、2008年)にまとめているが、その視点はまだ『浮雲』にとどまっているため、再検討が必要であろう。

詩「マルタプウラ」を『ボルネオ新聞』の1942年12月25日に、「雨」を1月29日に、「タキソンの濱」を2月2日にそれぞれ発表している。これらの詩にはマルタプウラやバンジャルマシン市といったボルネオの地名が登場している。さらに帰国直後、ボルネオの風物や地元住民の生活、オランダ植民地時代の人口管理政策などについて、「赤道の下」という紀行文として『東京新聞』の1943年6月11日から13日まで3回連載している。

また戦後作品においては「ボルネオダイヤ」(『改造』、1946年6月)、「作家の手帳」(『紺青』、1946年7月~12月)、「古い風新しい風」(『新風』1947年10月~1948年5月)などにボルネオがたびたび登場する。このように林芙美子の〈南方もの〉において、ボルネオはもっとも多く描かれている。彼女をここまで惹きつけたボルネオの魅力とは一体何だったのか。

例えば、戦後作品の中では唯一、タイトルにその地名をつけている「ボルネオダイヤ」では、ボルネオが以下のように描かれている。

こゝでは地球が動いてゐる感じなのだ。兩岸の家々は水に向かつて店を開いてゐる。呉服屋の前にも船を停めて買ひ物が出来る。米屋も雜貨屋も水ぎはであきなひが出来るのだ。小舟自身もコオヒイをあきなつてゐたり、タバコを並べて楫をゆるく漕いでまはつてゐるのもある。布袋草の根をかきわけて真裸の子供が泳いでゐる。人間と自然とが、この河筋だけ戦争とはおかまひなしにたはむれあひ、犬ころのやうにふざけあつて如何にも愛らしい自然の国を創つてゐるのだ。ボルネオの人たちにとっては、戦争ぐらゐ迷惑なものはないであらう。

ボルネオ島は東南アジアのマレー諸島に属し、北はマレーシアとブルネイ、南はインドネシアの国土となっている。ボルネオは熱帯雨林に覆われ、蛇のように長い河が這っている。南ボルネオに住んでいる地元住民は河岸に家を建て、河面を交通路とし、小舟で商売や運輸なども行っている。地元住民にとって、河は生活空間の中心である⁵。特にダイヤク族、ボルネオの奥地に住み、自然と共に生活している。

すでに戦火は南方全域へと広がっていたが、このボルネオだけは「人間と自然がたわむれあい」ながら、〈河〉のようにゆっくりとした時間が流れている。林芙美子是这样したボルネオの印象を、登場人物の口を借りて、「静かだねえ、戦争なんて何処のことかと思ふ位ね」と述べている。実際、南ボルネオにはオランダ人が少なく、また日本軍が到着する前にほとんどが撤収したために、林芙美子が訪れた頃のボルネオには、まだ戦闘らしい戦闘は行われていなかった⁶。

林芙美子はこの平穏さの中で、しばし戦争の現実を忘れることができたのだろう。彼女は「作家の手帳」⁷において、その生命感に満ち溢れた美しさを、郷愁とともに以下

⁵ Suriansyah Ideham, *Sejarah Banjar Kalsel*(Banjarmasin : Balitbangda Provinsi Kalsel, 2003), p.296.

⁶ 同上, p.320.

⁷ 林芙美子「作家の手帳」(『林芙美子全集』第6巻, 東京: 文泉堂, 1977), p.43.

のように語っている。

バンジャルマシンの一日は、夕方、規則的に訪れて来る豪雨と、螢と、食用蛙と、犬の遠吠えと、河を埋めて流れる布袋草のいとなみと、食堂の皿の上にむらがる蠅と、路上の焼鳥屋の椰子油のランプの光と、かつと照りつける太陽のめぐみとの連続です。(中略)何だか、人間の魂をゆすぶられるやうな原始的な素朴な美しさがあふれて、何千里も離れた故郷の姿がもうろうとかすんでくるのです。家族というものがなかったら、私は一生ここで埋もれていたいやうな気持ちになってしまいました。

ここでも〈河〉は、ボルネオの象徴として描かれているが、その〈河〉と並んで、人々の生活や自然のいとなみといったボルネオの多面的な美しさを表しているのが、「ボルネオダイヤ」のタイトルにもなっている〈ダイヤモンド〉である。

このことは、あるいは「ボルネオダイヤ」における人物形象にも明らかである。主人公の球江という名は、「球」と「江」、すなわち〈ダイヤモンド〉と〈河〉を連想させる。また「ボルネオダイヤ」は舞台として「マルタプウラ」を登場させることで、ボルネオを二つの空間にわけている。ひとつはバリト河の支流で、バンジャルマシン市内を二つに分けている「マルタプウラ河」、もうひとつはダイヤモンドの採掘企業センターとして知られている「マルタプウラ市」である。

作中で球江はタンバガンという小舟に乗ってマルタプウラ河で舟遊びをし、その直後にマルタプウラ市のダイヤモンド鉱区で働いている恋人の真鍋からダイヤモンドの原石を貰う。作品のタイトル「ボルネオダイヤ」がこの場面から取られていることも含め、どうやら林芙美子は〈ダイヤモンド〉に何らかの象徴的意味をもたせようとしていたらしい。本論では〈ダイヤモンド〉を手掛かりに、「ボルネオダイヤ」と林芙美子の戦後作品の位置づけを明らかにしたい。

2 林芙美子のボルネオ

林芙美子「ボルネオダイヤ」は1946年6月、雑誌『改造』に発表され、翌年の6月に関東出版社から刊行された単行本『淪落』にも収録された。この小説は1942年10月から1943年5月までの約8ヶ月間にわたる作家の南方体験に題材にした作品である。なおくり返すが、彼女は当初、その南方体験を詩やルポルタージュに描いていたが、戦後にいたってその媒体は小説へと移ってゆく。そのなかで「ボルネオダイヤ」は、もっとも早い段階に発表された小説である。

林芙美子は南方を旅した際、1943年の正月を南ボルネオ州で過ごし、数日間滞在している。当時、現地の新聞『カリマンタン・ラヤ』は文化工作のために接収され、朝日新聞社

のもとでボルネオ新聞社として再編されていた。彼女は朝日新聞社をスポンサーとして南方に出向いたため、現地では『ボルネオ新聞』などへの掲載がつねに意識されていたらしい⁸。

こうした事情もあってか、彼女のまなざしは、はじめからややボルネオびいきである。

このボルネオはスマトラや爪哇と違って、これからもどんどん人手のほしいところであり、土地は未開発の宝庫のように私は思えた。「作家の手帳」

また肌身離さず持ち歩いていた手帳には、首都のバンジャルマシン市を中心とした取材のほかに、資源開発についてのメモが残されている⁹。

ボルネオの石油
第一等
ダイヤモンド
年二千か三千カラット
一万六千カラット
買入半年
今後は年三万カラットに登るだろう
マンガーンマルタプウラ(ボルネオのマンガン) プレハリオ方面で探す。相当有望

この走り書きからは、林芙美子がボルネオの数ある資源のうち、とくに〈ダイヤモンド〉に注目していたことがわかる。彼女が書きとめているように、この翌年ボルネオでは三万カラットが採掘され、さらに翌々年には六万カラットの採掘が見込まれていた¹⁰。

この頃、軍需産業の拡大によって、砥石などにつかわれる工業用ダイヤモンドが大量に必要となり、現地では軍のお抱え企業による採掘がはじまっていた。例えば、軍が「野村東印度殖産株式会社」に出した指令書には、国家的使命としてダイヤモンド開発にあたるようにとの注意が並んでいる¹¹。

南部「ボルネオ島」工業用ダイヤモンド鉱区は海軍の管理に属す。之が経営委託は其の社に対する特殊権益の賦与には非ず、貴方に於ては真に国家の代行機関的使命と榮譽とを確認し、誠意之が開発経営に従事せられ、以て国家の要請に応へらるべき

⁸ 望月雅彦『林芙美子とボルネオ島-南方従軍と『浮雲』をめぐって-』（東京：ヤシの実ブックス、2008）、p.63.

⁹ 林芙美子「ボルネオ手記」（新宿歴史博物館蔵、1943）。

¹⁰ 「野村東印度事業計画書」（外務省外交史料館、1944）。<<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=M2006090409375091632&ID=M2006090409375291650&REFCODE=B05013004200>>

¹¹ 野村康三『野村徳七の海外事業 ―野村東印度殖産株式会社と野村ブラジル農場』（大阪：敷島印刷株式会社、1997）、p.37.

こと¹²。

ダイヤモンドをめぐるボルネオ開発の国策的性格について、もう少し林芙美子の言及がほしいところだが、残念なことに彼女が内地の新聞社に送った原稿には、「ゴムとか石油、ダイヤモンド、マンガンなんかも、特筆すべき産物だけれど、とてもここでは紙数がなくて書ききれない」と省略されている。ただ、ダイヤモンド鉱山で働く若い日本人技師の姿が、彼女には「涙ぐましい」ものと映ったらしく、「ここでは日本人は私達23人だけです仕事に忙しくて少しも淋しいとは思いません」という彼らの健気な言葉を紹介している¹³。

このようなダイヤモンド鉱区の視察を下敷きにしたのであろう「ボルネオダイヤ」は、球江という運命のむくまにボルネオへと流されてゆく女性と、眞鍋というボルネオのダイヤモンド鉱区で働く技師、そして内地にいる妻の三人の日本人の姿を描いている。

作品は球江がボルネオへと渡ったいきさつを回想するシーンからはじまる。球江は女学生のころ、毎日軍需工場に通う生活に嫌気がさし、卒業をまたず家を出た。上野駅の食堂で働いている時、コックの男と付き合っていた。彼との肉体関係によって、球江は妊娠した。子供を出産したのち、男は球江と相談せずに、子供を他の人に渡した。収入がなく配給ももらえない球江は男に頼りきりの生活から解放されるべく、ある日、熱海の旅館の主人に誘われるまま、南方のボルネオ島で働くことを決意した。

しかし、旅館の主人は約束を破り、球江は現地で身売りをせねばならなくなった。球江の客の中から、ダイヤモンド鉱区で働いている眞鍋という男と出会った。眞鍋は毎夜球江を訪ねてきたが二人は肉体関係をもたない。内地に妻子を残して来た眞鍋は球江との関係に将来性がないことを感じている。ある日、眞鍋は自分が掘り出したダイヤモンドを球江に与え、「内地へ戻ることがあったら指輪に下さい」と言った。しかし、現実的な球江はダイヤモンドの魅力を認めず、「財産」として金にすることを考えている。それ以前に、実際眞鍋は「もっとも素晴らしい」ダイヤモンドを内地の妻に贈ったが、夫の意図を誤解し、妻は愛国心からそのダイヤモンドを政府に供出した。

次章からは眞鍋、妻、球江のダイヤモンド観をみてゆき、林芙美子の多面的なボルネオ表象を捉えたい。

¹² 「工業用ダイヤモンド鉱区委託経営に関する指示事項」(外務省外交史料館, 1942)<<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2006090409375091632&ID=M2006090409375291650&REFCODE=B05013004200>>

¹³ 林芙美子「赤道の下」(『林芙美子全集』第16巻, 文泉堂, 1977), p.32.

3 植民地のプラトニックな恋愛

作品では、眞鍋が大学で採鉱を学んでいた頃、採掘企業である「N殖産」がボルネオへと進出したことになっている。この「N殖産」のモデルは、先に言及した「野村東印度殖産会社」のことであろう。

もう少しこの「野村東印度殖産会社」について述べると、「野村東印度殖産会社」ははじめボルネオでゴム事業をおこなっていた会社であり、その前身は「野村商店」の南洋事業部がつくった「蘭領ボルネオ護謨工業株式会社」である。その後、1941年の「南方占領地行政実地要領」によって南方進出企業への統制が強まると、「野村東印度殖産会社」は軍からの委託をうけて、ボルネオでのダイヤモンド採掘を任されるようになる。かくして「野村東印度殖産会社」は、多くの社員を内地からボルネオへと派遣することになるのだが、その中には眞鍋のような若い技術者も含まれていた。

眞鍋は大学の採鉱冶金科を出ているため、ダイヤモンド採掘の苦勞や、宝石としての価値を熟知している。彼はダイヤモンドを産業資源として扱う立場にしながら、心のどこかでは宝飾品としての価値を捨てきれず、〈ダイヤモンド〉に「美しい女」を重ねている。作中の言葉を借りれば、彼は〈ダイヤモンド〉を見るたびに、「柔い女の肌を空想」しているのである。

そのため、眞鍋は自分の手で掘りあてたダイヤモンドを妻や球江に与えている。ダイヤモンドを周囲の女性に与えるというこの行為は、そのまま彼の女性関係に置き換えることが可能である。ここで、林芙美子が眞鍋をどのような人物として描いているかをもう少し見てみよう。

軍隊といふのは、一つの土地を占領するまでは勇ましく突き進んで何も考へるひまもないけれど、一つの土地を占領して、そこへ落ち着いてしまふと、名誉のある軍隊の規律は、平和的なものに臆病になり、落ち着きがなくなってくる。四囲が平穩になればなるほど、軍隊の規律は乱れはじめてくる。濁ってくるのだ。眞鍋の場合もさうであつた。占領地の鉱区整備して走りまはつていゝうちは、生命を賭けるほどの思ひではあつたのだけれども、ぼつぼつ結果が現はれ始めてくると、眞鍋はもう退屈でやりきれない思ひに苦しめられている。日本人によく似たダイヤ族の、バブウ下女の歩く姿に茫然とみとれてゐたり、鉱区で砂を洗つてゐる馬來人やジャワ人の女たちの中から、美しいかたちを何となく求めてゐる卑しさに赤面することもある。

何より注目すべきは、男性として彼の側面が、ひとたび目的を達成すると、途端にモラルや規律を失ってしまう「軍隊」と並置されている点である。戦争の混乱さのなかにあらわれる平和と、その平和によって混乱する男たちの性は、占領地におけるひとつのパラドックスをあらわしている。作中で眞鍋はダイヤモンドを砂から拾いだす現地の

女性に欲情するが、こうした性の対象化は、占領者の道徳的退廃として描かれていると見るべきであろう。

このことは、あるいは植民地における搾取の関係とも無縁ではない。ボルネオのダイヤモンド採掘はほとんどの場合、前近代的な手作業で行われるが、その担い手の多くは女性である。この現地語で「Pendulang」と呼ばれる作業員は、ポンプで川から水を抜きながら土砂を分離し、フライパンのような道具を休まずに振り動かすことで、ダイヤモンドの粒を濾過する¹⁴。

ダイヤモンドは軍需産業に不可欠な材料であり、とくに海上輸送が途絶してから、当局は現地の資源とともに、現地の女性労働力を大々的に搾取した。眞鍋が現地の女性の泥にまみれた手からダイヤモンドを取り上げるという行為そのものが、占領者の欲望をあらわしているとも言える。

ここで慎重にしたいのは、眞鍋がこうした「名誉」と「欲望」の板挟みとなっている自己に、きわめて意識的な人物として描かれている点についてである。ここに彼と球江とのプラトニックな恋愛が挟まってくる。彼は彼女が娼婦であることを知っているが、肉体関係を求めることはない。彼は彼女に対して、あえて禁欲的であることによって「名誉」と「欲望」との葛藤からの解放を目指すのである。

球江の体を一夜の慰みものとすることは、禅で云ふところの、念の無念との究畢平等を意味することで、一瞬の情火がさつと過ぎてゆけば、また明日の朝は平和な世界が、眞鍋を悠々と落ちつかせることが出来た。このように言えば聞こえはいいが、ようするに彼は別のかたちで球江の体を利用しているのだ。

実際に眞鍋はこの関係が、かえって不純なものであることを自覚している。球江にダイヤモンドを与えたのは、おそらくは罪悪感のあらわれであろう。彼の「内地へ戻ることがあつたら指輪にしろ」という言葉は、球江との関係を一時的なものと考えているために出たものだが、それを彼はどこかで戦争のせいにもしている。

「戦争でなかつたら、君と結婚したいと考へてゐるんだけど、どうにもならないぢやアないか(中略)ここは戦場で、軍隊があるんだぜ。俺だつて軍属でもなかつたら簡単なんだけど、どうにもならないぢやアないか」

このように、眞鍋にとってのダイヤモンドは誠実さと不誠実さ、純粋さと不純さの象徴として描かれている。一粒のダイヤモンドには、妻への理想的な夫としてのふるまいのほかに、現地の女性への欲望や、現地妻の球江への禁欲などが含まれている。そして、こうした欲望の固まりであるダイヤモンドを女性に贈ることだけが、彼にとっ

¹⁴ L.K. Spencer, S.David Dikinis, Peter C.Keller, Robert E Kane "The Diamond Deposits of Kalimantan, Borneo"(Gems & Geology, 1988), p.67.

ての罪滅ぼしなのである。

4 〈銃後〉の女の疑似的な愛国心

次に眞鍋の妻のダイヤモンド観を見てみよう。彼女は「外地」にいる夫の眞鍋から、「大粒なもっとも素晴らしいコバルトダイヤモンド」を贈られる。しかしこのダイヤモンドを個人の所有物にはせず、数日のうちに国に差し出す。そして夫に「あなたの気持ちを無にしなかつたことを讃ください」と書いた手紙を送るのである。

この行動は、夫の視点からは「愛国心的なきもち」からのものとして説明されているが、それにしてもこの愛国心は観念的で、どちらかと言えば当時の新聞やニュース映画が紹介していた軍国美談に近いと言えるだろう。加納美紀の『女たちの〈銃後〉』によると、戦時下のメディアは、眞鍋の妻のように戦場から遠く離れた〈銃後の女〉たちの愛国心を煽る役割を果たしていた¹⁵。

ダイヤモンドをただちに政府に供出するという眞鍋の妻の行為は、〈銃後〉の女性の戦争協力として読み取れる。彼女は、夫がお国のために「外地」で働いているのだから、自分も同じように役に立とうと考えたのであろう。この「国防婦人会」的な精神は、政府から国民に植え付けられたものであり、作品では眞鍋の妻が〈銃後の女〉のステロタイプとして描かれているのである。

あるいは、妻がダイヤモンドを供出したもう一つの理由として、1940年の「奢侈品等製造販売制限規則」、いわゆる「七・七・禁令」をあげることができる。これにより、彼女はダイヤモンドのような贅沢品を身につけることができなかったとも考えられる。

「七・七・禁令」の主たる目的は、おおむね次の三点であった。まずは、「ぜいたく品製造のために使われる資材、動力、燃料等を、戦時国民生活に必要な物品の生産、供給の維持確保に活用すること」、また「ぜいたく品購入のために使われる余剰購買力を、貯蓄の強化、公債の消化等に転換せしむること」、そして「戦時国民生活の刷新、緊張を図ること」である。

こうした「七・七・禁令」を後押しするかのように、当時、大日本婦人会が刊行していた雑誌『日本婦人』¹⁶には、家庭のダイヤモンドの回収についての記事が掲載されている。「空の決戦へーダイヤモンド・銀・白金を應召させませう」という見出しにつづいて、ここには女性が供出する貴金属類が、いかに戦争継続に役立つかについて書かれている。

ダイヤモンド、銀、白金はいつでも航空機、電波兵器等の生産に無くてはならぬ

¹⁵ 加納美紀『女たちの〈銃後〉』（埼玉：イザラ書房、1995）、p.17.

¹⁶ 「空の決戦へー ダイヤモンド・銀・白金を應召させませう」（『日本婦人』、1944.10）、p.19.

資材なので政府では目下、交易営団、中央物資活用協会を通じて徹底的買い上げを行つてゐます。買い上げ期間は、ダイヤモンドは本年八月十五日から向かふ三カ月間、銀は十月月上旬から来年三月一杯、白金は九月一日から十一月十五にちまで。買い上げ場所は、指定百貨店又は中央物資活用協会が臨時に指定した場所で、隣組の回覧版ではまたは勤奨員が家庭へ知らせます。但し家庭で売つたり町の個人商店へ勝手に売らぬやう注意して下さい。買い上げ場所へ現品を持つてゆけば責任を以つて鑑定の上、即金で支払われます。価格はダイヤモンド一カラットに付き千五百円基準の許可価格に依り、銀は、銀製品の場合は含有純銀量一匁に付き三五銭、銀地金又は之に準ずるものは一七銭五厘五毛、白金は地金代と加工賃を入れて一匁約六十一円の割です。催促をまつまでもなく、最後の一つまでいますぐ進んでお役に立てませう。

内地でこうした情報の只中にいる眞鍋の妻は、決してダイヤモンドを身につけることはしないであろう。そこには抑圧を含んだ愛国心が存在する。彼女はダイヤモンドを受け取ることで夫の気持ちに配慮しながらも、国民として戦争協力に加担することを選んだ。ここでボルネオ産のダイヤモンドは、二人の愛情の象徴というよりは、内地と「外地」をつなぐ愛国心の象徴として描かれているのである。

5 移動する女性の身体

作品で球江は、かつて同棲した男と、女の子をもうけたことになっている。しかしその女の子は、男が相談もなく他人に渡してしまったため、それ以来会っていない。その後彼女は、ボルネオで眞鍋にダイヤモンドを贈られるが、このダイヤモンドははじめ、この生き別れたわが子を想起させるものとして描かれる。

球江は枕の下からダイヤモンドの包みを出して、もう一度明るいところで、ダイヤモンドをしみじみと眺めた。ふつと、何の関連もないのに、別れた子供の顔が眼に浮かんで来た。黄色をおびた石の色が冷く光つてゐる。ダイヤモンドを手にするといふことは、生まれて初めての経験で、球江にとっては微妙な気持ちだつた。指にあててみると、笑くぼのある寸のつまつた指には一寸淋しい石の色だ。心のなかで、私、ルビーの紅いのがよかつたんだけどと球江は正直のところさう思つてゐた。こんな石がそんなに高い物なのかしら、価値の高い割には魅力がないけど、お神さんはよく宝石屋を呼びとめてはダイヤモンドの品さだめをしてゐたけれども、このダイヤモンドをお神さんに売りつけてやらうかしらとも球江は思つてゐる。

堀口¹⁷は林芙美子の『浮雲』を例に、内地から「外地」へ移動する女性の身体と国策との

¹⁷ Noriko Jane Horiguchi. "The Body Politic in Modern Japanese Literature: Bodies of Woman and of the Japanese Empire in Yosano Akiko, Tamura Toshiko and Hayashi Fumiko's Writing". Dissertation. Faculty

関連について考察している。これによると、女性の「外地」への移動は、直接的には国策との関連をもたない場合であっても、間接的にはその一部として機能している。どこか自由意志のようにも思える女性の「外地」への移動は、しかし実際には帝国の拡大と足並みを揃えているのである。「ボルネオダイヤ」において、球江は流動的な人物として描かれているが、家出、同棲、ボルネオ行と移動してゆく彼女の身体が、内地から「外地」への帝国の拡大を意味していることに注意すべきである。

なお堀口の視点を借りれば、内地から「外地」への球江の移動は、国境を跨ぐ身体の旅である。球江は妊娠をへて、自ら運命が人並みのものではないことに気付く。身体の変化とともに球江の人生にも変化が訪れるが、それでも球江は自身の身体に所有権を持たない。球江が産んだ、すなわち自身の分身であるところの女の子は見知らぬ人間の手に渡り、ボルネオでは娼婦として自身の身体を見知らぬ男に任せ、さらには眞鍋には彼の贖罪の媒体として利用される。球江の身体は当初、内地の窮屈さからの解放という目的で移動したものの、ついにその身体に自由が与えられることはない。

ところで山下聖美¹⁸は、球江がダイヤモンドを眺めるシーンについて、彼女はここで子供を肌の一部として体感していると説明している。なるほどそのような見方もあるが、実際にはダイヤモンドは眞鍋との恋愛の行方という関心事にも向けられており、失われた過去であると同時に、取り戻すべき現在でもあると考えられる。ダイヤモンドの輝きは、彼女にとっての内地と「外地」、記憶と現実、過去と現在を結びつけるのである。

また球江の身体の運命は、採掘されるダイヤモンドの運命とも重なっている。〈河〉から掘りだされたダイヤモンドは、はじめ現地の工場に運ばれ、ダイヤモンド砥石などに加工されたのち、ふたたびどこかの軍需工場へと出荷されてゆく。その間、ダイヤモンドは美しさを評価されることなく、つねに実用的な資源として使用される。ダイヤモンドは球江と同様、戦争によって輝く機会を奪われていると読める。そしてこの悲しい運命を共有しているがゆえに、球江はダイヤモンドを「淋しい」「つまらない」ものと見なし、ダイヤモンドを「財産にする」ことを決意するのである。

山下は「ボルネオダイヤ」の分析をめぐって現地の植物イロンに注目し、林芙美子ははじめ〈河〉を漂いながらどこかへと向かっていくイロンに、その文学観や人生観を仮託していたと指摘している。これがやがて『浮雲』へとつながってゆくのだが、一方で〈河〉から掘りだされるダイヤモンドは、半ば強制された女性の身体の移動という、もうひとつの深刻なテーマを投げかけていると言えよう。

of Asian and Middle Eastern Studies. University of Pennsylvania, 2003.

18 前掲、山下聖美「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」(『日本大学芸術学部紀要』No.59, 2014.3)。

6 おわりに

「ボルネオダイヤ」を考察したうえで、いくつかの考えを述べたい。「ボルネオダイヤ」は日本占領地に移転した日本人の物語である。現地人の視点から見ると、真鍋、球江、澄子は支配者の立場に位置するが、実際は彼、彼女らも軍政の圧制から脱出することができない。球江らは窮屈な内地から逃げだして、外地でも自由を希望するが、結局その自由をなかなか手に入れられない。球江と澄子は自分なりの解放を見つけるほかはない。つまり、この作品は占領側である日本人の人物の占領地の贅沢な生活を描写することよりも、彼、彼女らが感じていた「不自由」や「植民地における搾取への罪悪感」やモラルと行動の間の葛藤に閉じ込められたことを描写している。

作中における一粒のダイヤモンドはボルネオで行われている日本植民地の多面的な現実を凝縮したものである。このボルネオのダイヤモンドには軍属である真鍋の「支配者である現在の行動」と「将来の名誉」の間の葛藤、占領地における日本軍政の失政への怒り、植民地による現地の搾取への失望が反映されている。このボルネオのダイヤモンドは真鍋の妻にとって、家長である真鍋との愛情に留まらない。それは天皇への愛国心を示すものでもある。球江にとって、このボルネオのダイヤモンドは二度と戻れない過去、支配された自分の身体、戦時中の不安定な恋愛の反映であるともいえる。言い換えれば、ボルネオのダイヤモンドは愛情を表象する媒体になるはずであるが、当時の国の抑圧によってその気持ちを伝えることが失敗になった。作中における日本人の間のロマンスは圧制にさらされたり、不自由だったりしたという事実を通して、「国に支配された日本人のロマンス」を作家は戦争の一つの側面として見ている。こうして、ボルネオのダイヤモンドに纏わる表象は「美しい愛情」ではなく「日本人の切なさ」を暗示している。

作品の中で、ロマンスが支配されている人物はダイヤモンドと関わる人物のみに制限されていない。悲惨な末路をたどっていた澄子と兵隊のロマンスはその一例である。二人は現地人に化けて逃げようとしたが、それがばれたため兵隊は死刑執行され、彼氏をなくした澄子は絶望し、最後に自殺した。澄子は真鍋と球江と同様に、自分のロマンスを国、この場合は地方の軍政の圧政から解放することができず、ある意味で国は国民のロマンス(感情)を支配していると読みとることができる。作品の結末に、慰安婦たちはタキソン浜へ行って弁当を開いて、「赤い海」を眺めながら、慰安婦のまさきが「戦争なんて何所のことかと思ふ位ね」と言及していることは、作中における「死亡」、「窮屈」、「恐怖」、「残酷」などのネガティブな雰囲気と対照的である。戦争がない場所において、日本人が「国によって殺されること」、「国の政策による恐怖と不自由」を実感することは林芙美子が捉えた戦争ではないかと窺える。

球江の人物形象はダイヤモンドの描写と平行である。詐欺によって南方に渡ってきた球江は異国で慰安婦として働かされ、その身体は軍隊に利用されることになっ

た。球江は自分自身の価値がわからず、他人から実用的な価値のみによって一方的に価値づけられる。それゆえに、球江は真鍋が贈ったダイヤモンドに対して、その美的な価値を認めず、実用的な価値から判断して財産にすることを決意した。ボルネオのダイヤモンドは球江の身体と同様に、植民地によって軍政に搾取された。そのダイヤモンドは遠く日本へ移送され、「愛国心の象徴」になったり「軍需工場」で利用されたりというような実用的な用途によってダイヤモンドの美的価値が消えてしまう。

作家は「ダイヤモンド」をボルネオの象徴と位置付け、ボルネオに対する自身の親近感を浮かび上がらせようとしている。なぜなら、まずボルネオの自然は作家の人生と連想させ、ボルネオの河で浮いているイロンの草が作家の流動的な生き方と共通している。戦中で書かれたボルネオの紀行文「赤道の下」において、芙美子はボルネオ島を「宝箱」と表現したため、ボルネオは貴重な場所として作家の記憶に残っていると考えられる。南方の経験に基づいた作品数を数えると、ボルネオについての作品がもっとも多く執筆されたという事実から、作家の南方文学の中でもボルネオは注目すべき地域ではないかと窺える。

しかし、この作品に対して批判すべきところがある。黒田秀俊『軍政』でのべられたように、南方へ渡航した船で林や黒田と同乗した女性慰問者の中に、林は球江のモデルとなる人物を発見したのではなかと推測する¹⁹。このように、作中に登場される日本慰安婦と慰安所は事実であることを確実性が高いと言える。一方で現地の資料によると、作品の舞台となるバンジャルマシン市には民生部の下で現地女性の慰安所が設置され、当時バンジャルマシン市の市役所の近くに、トラワンという現地女性の慰安所があるという記録が残っている²⁰。林芙美子がこの事実を知っていたかどうかは不明だが、作中に日本人の慰安婦のみ注目した作家の客観性を疑う。

執筆時期を視野に入れると、この作品を執筆した作家の意図を把握できる。林芙美子の戦後文学は「外地」と「内地」、「過去」と「現在」、「記憶」と「現実」の間の揺らぎが文学のテーマの一つである²¹。特に、外地を舞台とした戦後作品は内地の敗戦という現実に向きあいつつ、戦時中、占領地で過ごした贅沢な生活の記憶を背負うという内容がかなり多い。しかし、「ボルネオダイヤ」は戦後に書かれた作品にもかかわらず、戦中における外地の現実について語っている。このように、戦時中に作家が語れなかったことは「タイムマシン」の機能を果たす「ボルネオダイヤ」を通してようやく戦後に語ることができたのである。

19 黒田秀俊「国際法を犯して病院船に乗る」『軍政』（東京：学風書店、1952）、p.60.

20 Hindra, Eka & Kimura, Koichi. *Momoye Mereka Memanggilku : Biografi Sejarah Jugun Ianfu di Indonesia* (Jakarta : Esensi, 2007), p.58.

21 高山京子「戦後の成熟と完成」『林芙美子とその時代』（東京：論創社、2010）、p.207.

参考文献(Bibliography)

- 林芙美子(1977)「作家の手帳」『林芙美子全集第6巻』.東京：文泉堂. Hayashi Fumiko(1977) *Sakka no Techo*,『Hayashi Fumiko Zenshu Dai 6 Kan. Tokyo : Bunsendo.
- 林芙美子(1977)「赤道の下」『林芙美子全集 第16巻』.東京：文泉堂. Hayashi Fumiko(1977) *Sekido no Shita*,『Hayashi Fumiko Zenshu Dai 16 Kan. Tokyo : Bunsendo.
- 加納美紀 (1995)『女たちの(銃後)』.埼玉：イザラ書房. Kano Miki(1995) *Onnatachi no (Jyugo)*. Saitama : Izara Shoin.
- 黒田秀俊(1952)「国際法を犯して病院船に乗る」『軍政』.東京：学風書店. Kuroda Hidetoshi(1952) Kokusaihou wo Hanshite Byouinfune ni Noru. *Gunsei*. Tokyo : Gakufu Shoten.
- 望月雅彦(2008)『林芙美子とボルネオ島~南方従軍と『浮雲』をめぐって~』.東京：ヤシの実ブックス. Mochizuki Masahiko(2008) *Hayashi Fumiko to Boruneo Shima~Nanpou Jyugun to 『浮雲』wo Megutte*. Tokyo : Yashinomi Books.
- 野村康三(1997)『野村徳七の海外事業―野村東印度殖産株式会社と野村ブラジル農場』.大阪：敷島印刷. Nomura Kenzo(1997) *Nomura Tokushichi no Kaigai Jigyuu- Nomura Higashi Indo Shokusan Kabushikigaisha to Nomura Burajiru Noujou*. Osaka : Shikishima Insatsu.
- 高山京子(2010)『戦後の成熟と完成』『林芙美子とその時代』.東京：論創社. Takayama Kyoko(2010) *Sengo no Seijyutsu to Kansei. Hayashi Fumiko to Sono Jidai*. Tokyo : Ronsousha.
- 山下聖美(2014)「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」『日本大学芸術学部紀要 第59号』.東京：日本大学芸術科. Yamashita Kiyomi(2014) Hayashi Fumiko 「Boruneo Daiya」 wo Yomu. *Nihon Daigaku Geijutsu Gakubu Kiyo Dai 59 Kan*. Tokyo : Nihon Daigaku Geijutsuka.
- L.K. Spencer, S. David Dikinis, Peter C. Keller, and Robert E Kane (1988). The Diamond Deposits of Kalimantan, Borneo. *Gems & Geology*, Summer 1988.
- Noriko Jane Horiguchi (2003) The Body Politic in Modern Japanese Literature: Bodies of Woman and of the Japanese Empire in Yosano Akiko, Tamura Toshiko and Hayashi Fumiko's Writing. Dissertation. *Faculty of Asian and Middle Eastern Studies. University of Pennsylvania*.
- Hindra, Eka & Kimura, Koichi(2007) *Momoye Mereka Memanggilku : Biografi Sejarah Jugun lanfu di Indonesia*. Jakarta : Esensi.
- Suriansyah Ideham (2003) *Sejarah Banjar Kalsel*. Banjarmasin : Balitbangda Provinsi Kalsel.